

## 自然を歩く 16

## 【眺める自然と挑む自然】

150年が経過しようとしている日本の近代化はさまざまな分野で展開したが、登山もそのひとつである。戦後すぐ「第二芸術」論を発表して、俳句界に衝撃を与えた桑原武夫はそれまで日本人が到達したことのない山岳や氷河などの探検のパイオニアであった。探検記「チヨゴリザ登頂」（『桑原武夫集』第5巻、1959年）に、副隊長の加藤泰安と隊長である桑原の俳句をめぐる興味深いやりとりが載っている。加藤は俳諧・俳句に素養のある登山家であるが、ベースキャンプで孤独を託つ桑原に「第二芸術ご紹介」といつて数句送る。桑原はこれに応答して「第二芸術は粗製濫造で行くべし」として数句送り返す。芭蕉や蕪村は、平地を歩いて「眺める自然」を詠んだのに対して、加藤が「真夏にして真冬の途や氷河ゆく」など三句、桑原が「大水河吸い消されたる夜半の咳」などの「挑む自然」を数句詠んだ。近代になって日本人の経験の広がりや前近代では想像もできない世界を切り開いた。これに俳句の世界が対応できなかったというのが「第二芸術」論の隠れた主張なのかもしれない。